有島武郎の中国へのまなざし
――実現しなかった満韓旅行をめぐって――

Arishima Takeo's Glimpse of China
—The Unrealized Trip to Manchuria and Korea

陳　敏
Chen Min

摘　要

Abstract

Arishima Takeo and China has not been fully discussed except the reception of Arishima Takeo in China. What China means to Arishima has not yet been considered as an issue. However, one of his new year's plans for 1922 published in *Shinchō* was to make a trip to Manchuria and Korea. Although the trip had not been realized due to the influence of the abandonment of all his wealth, it was quite interesting why he planned to go to China at the turning point of his life. The purpose of this paper is to figure out Arishima Takeo's view on China and whether it is the same with contemporary Japanese writers' "Shina Shumi" (taste for China) or Asianism. To do so, this paper will focus on why Arishima planned a trip to China and what China meant to him. By analyzing his diaries and other texts, this paper points out that the perception of anarchism in Chinese society then and in Chinese tradition via Hasegawa Nyozekan resulted in his intention to visit China, which was different from "Shina Shumi". He did see the difference in China while most of contemporary Japanese writers saw China based on their own imagination. Furthermore, by discussing the reality he faced in Japan and what he thought about Japan, this paper also proves that the unrealized trip to China was an escape from political pressures in Japan at that time. Arishima Takeo's view on China or Korea could also be a clue to understand what he thought in his later years.

キーワード：有島武郎、中国、満韓旅行、無政府主義
Key words: Arishima Takeo, China, the trip to Manchuria and Korea, anarchism

はじめに

これまでの有島武郎研究において、「有島武郎と中国」という課題はそれほど注目されてこなかった。魯迅、周作人による有島の受容を考察する以外には研究が少なく、特に有島の中国認識については、まったくと言っていいほどに少ない。管見のかぎりでは、栗田廣美「有島武郎と岡倉天心・第一の序説――有島武郎に於ける「アジアの欠落」を考えるための仮説提示」(『研究年報 NO.4』白梅学園短期大学教育・福祉研究センター、1999 年）と、綾目広治「アジアをめ

ぐる言説・アジアからの視線と有島武郎」(『有島武郎研究』第 5 号、2003 年 3 月）のみである。なおこの二人の論考は有島武郎には中国を含む「アジアが欠落している」という点で一致している。しかし有島と中国との接点は薄いものの、日清・日露戦争時代を生きていた彼が中国に無関心だとは考えにくい。これまで顧みられてこなかった、中国認識という視点から作家有島武郎を読み解く可能性を見出すのが、本稿の目的のひとつである。

有島は一度実際に中国を訪れており、またその後に中国を訪れる計画ももっていた。中国を訪れたのは、1907 年に香港経由で帰国する際のことである。4 月 4 日の日記に「支那街をぶらついたが、とても面白い所だった。支那人は驚くべき國民だ――勤勉さと言い、忍耐強さと言い、身體の頑健さと言い（中略）子細に研究すれば随分面白いに違いない」[1]と有島は記している。しかし、それは彼がエキゾチックな街並みや中国人を見た感想にすぎず、考察する必要があるものではない。そして、中国行きの計画は、1922 年の『新潮』新年号において公表され、そこで、有島は「今年中には、是非満韓の方を旅行して見る」と中国行きの志を述べている。さらに、同じく 1922 年 1 月には友人の吹田順助宛ての書簡において「此春は出来るなら朝鮮から支那に遊びたいと考えています。支那人と其生活には特殊な観察が出来るかとおもいます」[2]と、中国に並々ならぬ関心を示しており、この前後の書簡でも有島はしばしば満韓旅行の話に触れている。実際には、財産放棄の影響で彼の中国旅行は実現されなかったが、彼がなぜ晩年に中国旅行を企てていたのかは考察する余地があるだろう。

本稿では有島が 1922 年に企画していた満韓旅行を取り上げたいと考える。その意義としては、ひとつめに、1922 年 1 月という時期は作家有島武郎にとって大きな意味があるということである。彼は 1920 年から創作上で行き詰まりを感じつつあり、1922 年になり「宣言一つ」・財産放棄・農場解放などによって思想と実行上の不一致を総決算しており、しかも、そのわずか 1 年半後に自殺している。この時期に彼がなぜ 1 ヵ月以上の中国旅行を計画したのかは、看過できない問題であると考える。ふたつめに、同時代の文脈を参照しながら、「有島が中国へ行きたい」ことを検討すれば、そこに潜んでいるものが浮上すると考えるからである。なぜなら、有島が実際に出発しなかった旅行だけに着目すれば、作家論的な言説に搦め捕られることになるが、1922 年に日本の近代ツーリズムの発展、中国大陸での鉄道網の整備、そして大正文学におけるエキゾチシズムの連鎖作用によって、雑誌『中央公論』の 1 月号に「支那趣味の研究」の特集が生み出されたことを考えれば、どうであろうか[3]。西原大輔は大正時代の「支那趣味」というのは、日本人が頭の中で作り出したものであり、その意味でサイードのオリエンタリズムと同じだと示唆している。それでは、有島武郎の中国へのまなざしは、「支那趣味」と同質なものであるのか、あるいはまったく別のものであるのか。そこに見られる有島のスタンスもまた彼を読み解く一つの手がかりになるのではないか。本稿はこの満韓旅行の経緯を整理しつつ、有島武郎における意味づけを検討してみたい。

1　満韓旅行の経緯について

この満韓旅行は、従来の研究では触れられることが少なかったため、まずはその経緯を整理してみたい。

筑摩書房版全集の年譜[4]によれば、有島武郎に中国行きのオファーがはじめて来たのは 1921 年 5 月頃である。それはドイツ文学者成瀬無極からの上海講演の依頼によるものであった。しかし、その前後の書簡をみれば、さらに 1 年前の 1920 年に有島が中国を訪れる可能性があったことが指摘できる。当時中国に起こった猛烈な排日運動に対し、内山完造の提案で上海 YMCA（基督教青年会）が夏期講座を計画することになった[5]。毎回日本の大学教授を 3 名招聘しており、吉野作造に講師の推薦を依頼していた。第 1 回は 1920 年の夏、講師は、経済学が森本厚吉、文学が成瀬無極、社会学が賀川豊彦であった。それに関して有島が 1920 年 7 月 17 日森本厚吉宛の書簡で「上海には文芸家として成瀬（京都の）無極君が行くようですね。私之可なり親しい知人です」[6]と書いている。吉野作造及び森本厚吉は上海講演へ文学者を招く際、長年の親友でこの年の 5 月から一緒に「文化生活研究会」を発足させた有島武郎をまず思い出したと推測できるのではないか。翌年有島が成瀬無極宛ての書簡（1921・5・14）に「吉野、森本両博士を通しても YMCA の依頼がありました」[7]とあることからも、上海への講演依頼があったことは確かだといえよう。以上からわかるように、1920 年の時点では、有島が中国へ旅行する意欲は、まだ薄かったといえる。

しかし、1921 年になると、彼の心境も、少しずつ変化しはじめた。例えば、成瀬無極が帰朝後上海講演を依頼した時、有島は子供の保姆が見つかっていないという理由で、それを辞退したものの、「来秋は或は満鉄の談話会からも呼ばれるかも知れませんから、其頃適当な人が見つかっていたら上海の方へも都合して出かけて見ようかとも思っています」とも書いている。ここで、有島ははっきりと中国へ旅行する意欲を示した。その変化を垣間見るために、以下少し長い引用となるが、1921 年 5 月から 1922 年 6 月にかけての有島の書簡を、少し追っておくことにする[8]。

若し滿韓に行くやうになったら其紀行を年末に出したらどうだらう。

1921・7・23　足助素一宛

此秋は滿韓に行かなかったら今年中に著作集を二冊出すつもりでゐます。

1921・7・27　原久米太郎宛

本秋は滿鉄読書会の依頼に應じ滿韓行脚を致さんものと思ひ立ち居候處障ありて遂に不果遺憾に存居候。其中宿望を果度存居候間其節は久々の御面晤も相叶可申かと楽み居候。

1921・9・28　有馬純吉宛

此春は出来るなら朝鮮から支那に遊びたいと考へてゐます。支那人と其生活には特殊な観

察が出来るかとおもひます。

1922・1・19　吹田順助宛

滿韓の旅行も如何なる事やら分りません。私が財産の整理をするのを聞いて滿鐵の重役があんな人間を頼んではたまらないといってゐたさうです。神經質には驚きますが一方から考へれば無理もありません。かうして私は好んで自分から世間をせまくして行くのでせうか。

1922・4・11　勢田おたま宛

私之滿清行は未確定（ママ）した事ではありませんので到底唯今より御約束が出来かねるのです。

1922・4・11　箱木一郎宛

滿鐵の讀書会からは思想が過激だといふので排斥されたらしいので行かれるか如何かわかりません。

1922・4・13　近藤七郎宛

滿鐵からは危險物視せられてボイコットを喰ふ滑稽に遇ひましたが縱令其誤解がとけても目下之處では出懸けられさうにもありませむ。

1922・5・15　箱木一郎宛

私の滿韓行は又實現されるやうになるかも知れません。さうなったらお目にかかれてうれしいだらうと思ってゐます。

1922・5・20　井上智・美名宛

滿韓行の事は如何しようかと迷ってゐた爲めに遂消息も申さずにゐましたが到底行けないことになって斷り状を出してしまひました。それ故貴地を通過する機會も当分は得られないかと思ひます。来年の春は出かけたいものと思ってゐますが。

1922・6・13　高山林太郎宛

上記の書簡を読んでわかるのは、当時文壇で活躍していた有島が各地から講演の依頼があったにもかかわらず、この満韓旅行を 1 年以上も期待していたということである。1922 年の春前後で、満韓旅行の計画を公表したことからも中国へ行きたい気持ちは確かなものだといえよう。有島が具体的にどのような形で満鉄に声をかけられたのかについては、残念ながら今のところ資料が見つかっていない。最終的に財産放棄などの影響で満鉄の重役に見捨てられたが、有島が 1 年以上も中国行きを期待していたこと自体、注目に値する。もっとも「国策」の満州宣伝旅行に反帝国主義を唱えていた有島が応じたことも興味深い問題だが、ここでは論じない。では、有島武郎はなぜ晩年にそこまで満韓旅行を期待していたのか。

2.1　長谷川如是閑による「中国」の発見

1920 年前後で作家が中国を旅行することは決して珍しいことではない。それどころか、大正文壇のブームの一つであったと言っても過言ではない。数々の中国旅行記も書かれており、例えば有島が満韓旅行計画の公表に先立って、芥川龍之介は 1921 年 8 月から 9 月にかけて「上海游記」を『大阪毎日新聞』に発表している。文壇で中国への関心が高まりつつあったなか、有島もその流れに乗ったと考えられる。

しかもそれ以前に有島武郎も中国を題材にした作品を書こうと試みていた。とくに彼は、1915 年に中国を旅行した弟有島生馬が帰朝後に、武郎をモデルとして書いた小説「孤鸞鏡中影」を読んで、大いに刺激を受けている。このことは彼の「孤鸞鏡中影」に対する評価からもうかがえる。一例として有島の生馬宛ての書簡を見ておきたい。

> 日本人で支那をあれ丈けに觀察した人は（縦令印象的にせよ）まだなかったし又容易に出る事もないと思はれます。北京に這入ってからも面白いが途中の敍景は僕には非常に印象の深いものでした。異國の風味が新鮮な果物のやうにさくさくと味はれます。[9]（有島壬生馬宛、1916・7・22）

面白いことに、同じ年に有島も中国を題材にした戦記物を執筆しようと考えていた。

> 午後大橋圖書館へ出かけ、奉天の戰いについて少々調べる。今朝、志賀直方と妻君が来た。彼はその戰いで自ら體驗した出來事を話してくれた。それを物語の形にしたらとてもいいだろうと思った。だから材料を集めようとしたのだが、無駄だった。[10]（「観想録第十六巻」、1916・5・16）

志賀直方は『白樺』同人志賀直哉の叔父で、日露戦争の奉天会戦で眼に重傷を負った人物である[11]。志賀直哉の作品「和解」や「叔父直方」などにもしばしば登場している。有島武郎は彼の戦争体験に基づいて、自分なりの物語を執筆したいと思ったが、材料が収集できず、断念せざるを得なかった。しかしながら、間接的とはいえ、有島武郎が中国の異国風味や奉天会戦に、文学創作の題材を見つけようとしたのは事実であろう。ただ、この時期になっても、彼は中国旅行の意志をはっきりと示さなかった。しかも、その後は中国にほとんど言及しなくなった。

しかし 1921 年 11 月 14 日になって、満韓旅行の計画を公表する直前、彼は再び中国関係の話題に触れている。

> 夜長谷川如是閑氏来談（草の葉會）會集十七八人　十一時に至る。<u>支那の話、支那には生活本意の生活かあって治的生活とは全く風馬牛なり</u>との説、氏之虚無主義を談って中々

面白し、而かも氏も亦挿象によって事をいふ人なるが如し。[12]（「最後の日記」、1921・11・14、下線部は筆者による、以下同じ）

日記から推察する限り、長谷川如是閑の中国論によって有島の中国関心が蘇ったといえるだろう。そして数日後、「草の葉会」会員の谷川徹三宛（1921・11・19）の書簡でも、有島は以下の内容を書いている。

昔私が無政府を主張した時蠟山君などは國家基本の世界主義を主張してゐましたが、この頃は大分あの人達も考へが變って来たやうです。時勢といふものは不思議なものだと思はれます。前會には長谷川如是閑氏が来て盛に支那の無政府的實情を讃美しました。面白い會合でした。[13]

「草の葉会」とは一高や東京帝大の学生たちが中心的なメンバーとなり、有島を囲む読書会である。ホイットマン詩集の講読以外に、有島が積極的にクロポトキンや無政府主義の思想を紹介していたものの、彼の苦悶が社会学や経済学の知識不足によるものではないかと学生たちは考えていた[14]。そこで、1921 年 10 月初旬に中国旅行から帰朝したばかりの長谷川如是閑が中国の「無政府的実情」及び「生活本意の生活」を語っていた。1922 年前後有島がついに満韓旅行を決意したのは、長谷川如是閑の中国論と深く関係しているのではないだろうか。そのため、以下で当時有島が聞いた長谷川の中国論を、簡単に整理する。

有島と長谷川のやりとりが増えたのは 1919 年、雑誌『我等』の創刊をきっかけにする[15]。それと同時に、中国問題に並々ならぬ関心を持っている長谷川自身も本格的な中国論を展開しはじめた[16]。以下に田中浩や銭昕怡の先行研究[17]を踏まえながら、1922 年前後の長谷川如是閑の中国論をまとめてみる。

（一）中国は国家観念を持っていないため、民族統一を困難にしている。その一方で、中国固有の「天下思想」は世界主義や人道主義と同じく、「超国家的根底」を持っており、帝国主義の征服非征服関係を超克して世界を安定させる可能性がある。（「大世界と小世界」、1919・5）

（二）中国は文化が発達した国であるが、革命を起こすような経済事情がまだ成り立っていない。文化の高度の発達によって中国でアナーキズムが発生したが、それは思想より社会事実が無政府的である。中国固有の老荘や孔孟思想に「現代的小国家主義」につながる思想的類似性があり、帝国主義的傾向を排除して、新しい国家形態を実現する可能性がある。（「ラッセルの社会思想と支那」、1920・11）

（三）当時日本は個人の生活より国家利益を絶対視する国家主義風潮が強かったが、それに対して、中国は「国が亡びようが興ろうが、生活がそんなものと没交渉に繁昌して行く」とい

う態度であった。政治的生活を捨てても、人間らしい生活を重視している。(「支那を見て来た男の言葉」、1921・11～1923・3)

以上からわかるように、長谷川が有島武郎に語った中国像は、近代的な国家主義・帝国主義の枠から逸脱し、個人の生活を重視する無政府的な社会である。そのような社会に、有島武郎は興味が湧いたに違いない。というのは、有島が反国家・反帝国主義そして無政府主義の傾向を持っていた[18]のは、すでにたくさん論じられているとおりだからである。特に、国家・社会・個人三者の力関係に対し、有島はしばしば緊張感を持って個人の自由を強調している。例えば、1921 年 11 月 19 日に掲載された「軍備制限問題に就いて」においても、有島は「國家自身の膨張の爲に」、個人の「自由と進歩」が「狭窄」されることを「許してはならない」[19]と強く主張した。その意味で、一貫して国家主義、帝国主義、侵略主義に反対していた長谷川如是閑は有島武郎と近い立場にある。そして、1921 年 8 月から 10 月にかけての第 1 回中国旅行で、長谷川は実際に目撃した政治交代と民衆生活とがかけ離れた中国の実情に、「二元社会」の典型を発見した。彼が有島に語った中国論は、有島が長年抱えている課題を解決する可能性と、解決の典型例を示したといえよう。

2.2 日本の政治的生活からの逸脱

有島武郎が中国の「政治的生活とは全く風馬牛な」る生活に憧れていたのは、当時の日本社会状況や政治言論環境とも関係している可能性がある。大逆事件後、有島が自ら自分の仕事を芸術のなかに限定していたことはよく知られている。しかし、満韓旅行の計画を公表する前後にあっては、彼は当時の日本の政治についてしばしば議論を行っている。そのなかでも、特に検閲制度について有島は以下のようにはっきりと不満を表している。

> 芸術は法律によって検閲し得るものでないと思ひます。立派な政治が行はれて、芸術の絶対的立場から批判し検閲することの出来る時代が来ない限り、正しい検閲の効果は挙げ得ないと思ひます。また、今後何の位の年がたって、それが完全に行はれるかといふことも、想像出来かねます。が、とにかく、現在の日本の状態には不満を感じます。[20] (「政治と藝術の争闘」、1922・9)

実際、1919 年の『或る女』改稿に際して有島が検閲側(内務省の図書課長)の意思を確認した結果、相当な部分の削除もしくは訂正が求められた[21]のである。とくに 1920 年に発生した森戸辰男の筆禍事件は、さらに有島にショックを与えたのではないか。森戸辰男が『経済学研究』創刊号に掲載した論文「クロポトキンの社会思想の研究」で休職処分にされたのは、クロポトキンに面会したこともある有島にとって決して他人事ではなかった。このことについて、彼が

大島豐宛の書簡（1920・1・17）で「今頃重大な興味ある問題」だと書いていることからも、その深刻さがうかがえよう。その後、彼は読売新聞記者のインタビューに対し、「クロポトキンの印象と彼の主義及び思想に就いて」（1920・1・25）でクロポトキンとの面会の経緯、そして簡単な無政府主義理論を語り、自身の立場を明らかにした。ここで注意すべきことに、森戸が処分された理由は、該論文が法に触れ、クロポトキンを研究対象としたことそのものだということである[22]。当時森戸支持派のなかでも、クロポトキンの名前や無政府主義の思想には言及せず、学術の自由の観点にのみ基づいて森戸を擁護した人が少なくなかった。なぜなら、明治末期からクロポトキンが日本ではタブー視されており、そのきっかけは、無政府主義者たちがクロポトキンの思想的感化を受けて天皇の暗殺を計画した大逆事件にあった。クロポトキンの名前に触れるだけでも、政府から危険視されるリスクがあると知識人たちは理解していたといえる。しかし、有島は森戸辰男の公判を傍聴し、積極的に関与していた。大逆事件時、コメントを一切しなかった有島武郎は、ここで反逆的な姿勢を示したといえよう。

田辺健二は大逆事件に関して、「思う存分の創作をすれば、牢獄に投げ入れられることも覚悟しなければなるまい」[23]と有島の心境を指摘している。しかし、晩年になっても、有島は思う存分に創作する自由が得られなかった。例えば、大森眠歩の原稿を読んだ後、大森宛の書簡（1920・1・25）にある「一つの創意之ある作品だと思ひました。然しこれて其材料と表現との關係から到底發表してくれる本屋はあるまいと思ひます。あれ丈けの内容でも發賣禁止を恐れなければならない御治世なのですから」[24]という内容からも、作家である有島が感じていた創作上の窮屈さがうかがえる。それも、ある程度彼の晩年における創作の不振に関係しているにちがいない。長谷川如是閑を通じて中国を知った有島は、日本の政治的生活から逸脱し、無政府的な中国へ行って、創作力を取り戻すことを期待していたのではないか。

興味深いことに、芥川龍之介は中国を訪問した際、胡適に創作の自由を語ったことがある。

> 芥川が更に言うには、中国の著作家が享受している自由は、日本人が得ている自由に比べ遥に大きいと思う、とても羨ましい。実際は中国の官僚が私たちに自由を与えようと願っているわけではなく、彼らが一つには私たちが何を語っているか分からぬため、二つには私たちに干渉する度胸と能力とを持ち合わせていないことによるにすぎない。芥川が言うには、以前彼が小説の中で、古代の好色な天皇が女性に背中に馬乗りにさせるのを書いたところ、とうとうこの本は出版できなかった。[25]（『胡適日記』1921 年 6 月 27 日）

胡適に言った芥川のこの言葉を、有島はむろん知らなかったが、言論空間の窮屈さを芥川と同じように感じていたに違いない。さらに、無政府主義的な傾向を持っていた彼は、日本の政治的生活から逸脱したいという気持ちによっても、長谷川が語った政治交代と民衆生活とがか

け離れ、二元的に共存している中国社会に憧れたことだろう。1921 年 11 月頃長谷川如是閑の中国論を聞いた有島は、遂に 1922 年 1 月に「今年中には、是非満韓の方を旅行して見る」と公表することとなったのではないだろうか。

しかし実際には、有島が中国を旅行することはなかったため、旅行の経緯のみを掘り下げるだけでは、考察を深めることはできない。そこで、同時代の文脈を踏まえ、有島武郎の中国へのまなざしという視点から、作家有島武郎をどのように評価するのかを以下では論じていく。

3　有島武郎の中国へのまなざし

西原大輔が J・A・フォーゲルを踏まえた整理[26]によれば、日本近代文壇では、主な文学者のほとんどが中国旅行を経験しているとのことである。作家たちの中国体験に基づき、中国をめぐる多様な言説が生み出されている。しかし、特に大正期においては、中国をめぐる言説はほぼ二つの定型に分けられると考える。一つは、作家自身の想像を中国に投射し、中国が異国情緒あふれる国として描く、所謂「支那趣味」の類である。もう一つは近代的な価値観を持って、半植民地化された中国の現実を体験し、中国が近代国家の対立面として、不潔で野蛮な未開の地に容赦なくされていた様を描写する類である。後者はのちに「中国を救う」ようなプロパガンダにつながり、国家主義、アジア主義的な言説に回収されつつあった。もちろん、今の時代から考えれば、当時の中国をただ幻想の天国あるいは野蛮な地とみなしたことを、客観的な観察だと評価することはできない。しかし、当時、作家たちがどのような視線で中国を見ていたのかを明らかにすることで、各々の立場を読み取ることはできるだろう。その意味で、有島が向けていた中国へのまなざしを明らかにすることは、作家有島武郎を読み解く一つの手がかりになるのではないか。

まず、大正期に流行っていた「支那趣味」と比較しながら検討する。いわゆる「支那趣味」は作家によって意味合いが多少異なるが、作家たちが頭の中で作り出した、想像した中国であると言っても差し支えない。ピエール・ロティが日本を西洋オリエンタリズムをもって、まなざしていたように、日本の作家たちが中国を対象に「支那趣味」を生み出している。そのような異国趣味は中国の現実社会を見ておらず、非歴史的である。そのためか、「支那趣味」の次に、「印度趣味」も生み出された。とはいえ、ここで「支那趣味」文学に価値判断を下すつもりはない。ただ、いわゆる「支那趣味」の作家たちは現実社会への関心が薄いと言わざるを得ない。それに対して、有島武郎は中国社会への関心があったからこそ、中国旅行を計画していたのである。繰り返して論じてきたが、有島は真剣に国家・社会・個人の関係を考えていたからこそ、長谷川如是閑の中国論を聞いて、中国に憧れるようになった。その憧れは文学者の幻想によるものではなく、彼の一貫した思想に通じており、日本の社会をまなざす視線にもつながっていると思われる。この中国旅行の計画から、有島武郎は思想的な作家であることを再確認できた

と言ってもよい。

さらに、中国を野蛮未開の地とみなす言説と照らし合わせて、有島の中国行きを考察する。当時の日本社会は大正デモクラシー後期から昭和ファシズムの開始期にあたっている。文壇では、有島が言及した「国家基本の世界主義」が流行っており、帝国主義支持の立場に立っていた人は少なくなかった。それに関しては、柄谷行人も大正時代の特徴は西洋に対して緊張感をもつ一方、中国あるいはアジアへの意識は消滅している[27]と論じている。作家たちは世界各地へ旅行するようになり、とりわけ中国のようなアジアの国に対する緊張感はなくなった。中国や朝鮮をただ野蛮で未開の地とみなしたのは、むろん現地の下層社会の見聞を強調したものであり、帝国と植民地・半植民地という不均衡な権力関係によるものでもある。宗主国が植民地にもつ蔑視もそこで形成されている。結果、人道主義や民主主義のような近代的価値観を主張していた作家が中国を差別する雰囲気を醸成し、のちに植民活動を美化したり、侵略戦争に加担したりしたのである。西田勝は近代日本の文学者と戦争について、以下のように指摘している。

> 文学界をふくめて思想界の大勢は、日露戦争の開始及び遂行に対して積極あるいは消極的支持であった。（中略）どうしてほとんどの作家や詩人たちが、そうなってしまったのか。それは結局のところ彼等の眼にアメリカやイギリスとの関係が見えても、朝鮮や中国をはじめ第三世界の人々の姿が映っていなかったからである。言いかえれば、国際関係において被害者としての自分は見えても加害者としての自分がはっきりと見えていなかったのである。[28]

換言すれば、戦争に加担していた文学者や思想家は、「近代一般」に対しては人道主義を提唱しながら、具体的な植民地中国や朝鮮に対しては、国家主義の枠を越えていなかった、ということである。しかし、有島武郎はそうではなかった。有島の中国へのまなざしには、帝国主義の征服・非征服の関係を越えた、無政府主義的な社会への憧れがある。同時代の作家たちと異なり、彼は対等に中国の異質性を見ていた。そして、彼が見ようとしたのは、日本の植民地である中国ではなく、無政府的な社会の実情であり、民衆が生活を重視する国であった。

つまり、有島武郎の中国へのまなざしには、国家主義・帝国主義を越えた植民地への同情がある。と同時に、同時代の作家が近代一般への人道主義を唱えていただけなのに対して、中国という国を対等にとらえ、中国の異質性をしっかりと見ていた。さらに、大正期に流行っていた「支那趣味」とは異なり、彼は社会への関心を持って、現実的な中国を見るために、中国旅行を計画していたのである。

おわりに

以上、「有島武郎における中国」という課題について考察してきた。簡単に整理すれば、有島武郎が晩年になって、満鉄による中国への招待旅行を 1 年以上期待していたことと、その期待の背景にあった原動力に、志賀直哉と同様、志賀直方の戦争体験や、弟生馬が中国見聞を活かして小説「孤鸞鏡中影」を書いたことがあったことを、まず明らかにした。これは創作力を取り戻したいと苦心していた有島武郎にとってはもちろん中国旅行の動機のひとつである。しかし繰り返して論じてきたように、その決定的な理由は何より長谷川如是閑が提唱した中国論に接し、有島が日本の帝国主義・国家主義を中国が超克する可能性に気づいたことである。付け加えれば当時は検閲により有島の創作の自由が制限されており、それをきっかけに無政府的な中国へと脱出したい気持ちもあったことが推測される。同時代の作家たちの「支那趣味」のような幻想または植民地を差別する言説とは異なり、有島は対等に中国を見ており、政治と民衆生活がかけ離れた中国社会に憧れていたのである。

田辺健二は有島武郎の死を「近代日本に絶望した果ての死」[29]としてとらえている。それが事実であれば、この実現しなかった満韓旅行に、有島はその絶望から脱出するための希望を一度は見いだしていたようにも思われる。そして何よりも、大正期に加害者意識の欠如により中国をはじめアジアの植民地を見ず、あるいは同質性しか見ていなかった時代の風潮に、有島が流されていなかったことは評価すべきものだと考える。

これまでの有島研究はアメリカやロシアからの影響ばかりが注目され、本稿で追ってきた晩年の有島武郎の、植民地であった朝鮮や中国へのまなざしについては無視ないし軽視されてきた。しかしこれもまた、作家有島武郎を読み解くひとつの手がかりになることは、本稿が示したとおりである。

注

1 『有島武郎全集第十一巻』、筑摩書房、1982 年 7 月 23 日、p.344。原文は英文、日本語訳は全集による。

2 『有島武郎全集第十四巻』、筑摩書房、1985 年 6 月 30 日、p.442。

3 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム――大正日本の中国幻想』、中央公論新社、2003 年 7 月 10 日。

4 『有島武郎全集別巻』、筑摩書房、1988 年 6 月 30 日。

5 内山完造『花甲録』（岩波書店、1960 年 9 月 20 日）に YMCA 夏期講座の経緯について詳しい説明がある。

6 前掲『有島武郎全集第十四巻』、p.223。

7 前掲『有島武郎全集第十四巻』、p.337。

8 書簡の引用は筑摩書房版『有島武郎全集第十四巻』、それぞれ p.369、p.372、p.399、p.442、p.480、p.480、p.481、p.496、p.499、p.508 による。

9 『有島武郎全集第十三巻』、筑摩書房、1984 年 6 月 30 日、p.429。

10 『有島武郎全集第十二巻』、筑摩書房、1982 年 11 月 30 日、p.480。

11 酒井三郎『昭和研究会――ある知識人集団の軌跡』、株式会社ティビーエス・ブリタニカ、1979 年 6 月 1 日、p.13。

12 前掲『有島武郎全集第十二巻』、p.308。

13 前掲『有島武郎全集第十四巻』、p.420。

14 草の葉会については、杉淵洋一「谷川徹三に継承された有島武郎の審美眼」（「名古屋大学文学部研究論集」（文学 61）、2015 年 3 月）がある。

15 長谷川如是閑は「「永遠の叛逆者」有島君」（『長谷川如是閑集第一巻』、岩波書店、1989 年）において「私が有島君と個人的に知ったのはその大正八年頃からのことであった」と説明している。

16 田中浩「長谷川如是閑の中国論（上）――『国亡びて生活あり』――」、『大東法学』1-1、1992 年 1 月 31 日、pp.1～40。

17 田中浩「長谷川如是閑の中国認識――辛亥革命から満州事変まで――」（『田中浩集第四巻』、未来社、2014 年）と銭昕怡「一九二〇年代における長谷川如是閑の中国革命論」（『同志社法学』56 巻 7 号、2005 年）を参考とした。

18 多数あるが近年のものでは、田辺健二「有島武郎と戦争」（『語文と教育』（19）、2005 年 8 月）、綾目広治「有島武郎と国家・資本主義・戦争」（『国文学解釈と鑑賞特集：有島武郎――作家と作品』、2007 年 5 月）などがある。

19 『有島武郎全集第八巻』、筑摩書房、1980 年 10 月 20 日、pp.629～630。

20 山田昭夫・内田満共著『有島武郎上』、桜楓社、1975 年 1 月 10 日、p.79。

21 1919 年 2 月 17 日足助素一宛の書簡（『有島武郎全集第十四巻』、筑摩書房、1985 年 6 月 30 日、p.31）で言及している。

22 森戸の筆禍事件については、先行論では中村勝範「森戸事件と吉野作造の『クロポトキン論』」（慶応義塾大学法学研究会「法学研究：法律・政治・社会」No.8、1994 年 8 月、pp.1～32）がある。

23 田辺健二「有島武郎と大逆事件」、『有島武郎と社会』、右文書院、1995 年 5 月 10、p.142。

24 『有島武郎全集第十四巻』、p.153。

25 原文は中国語、日本語訳は藤井省三『中国語圏文学史』（東京大学出版会、2011 年 10 月 21 日、p.45）による。

26 前掲、西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム――大正日本の中国幻想』。

27　前掲、柄谷行人編『近代日本の批評明治・大正篇』、p.160。

28　西田勝編『戦争と文学者』、三一書房、1983 年 4 月 30 日、pp.10〜15。

29　前掲、田辺健二「有島武郎と戦争」。